

■ 活動記録 ■

◆ 市民との共同実践 ◆

「ジモト／地元」をめぐる研究／共同実践

先端社会研究所では、2009年度より、「ジモト／地元」をキーワードとして、シンポジウムなどの取り組みを行ってきた。今後、得られた成果をどのように研究所の事業—研究・調査、教育、「民」との協働—に活かしていくか。以下では、参加者による報告書や回顧とともに、これまでの取り組みを整理し、今後の活動に向けて検討する機会としたい。

◆先端社会研究所としての「ジモト／地元」への関わり方

—「Sキューブ」の理念に向かって—

阿部 潔（関西学院大学先端社会研究所 所長）

先端社会研究所が取り組む研究事業のテーマとして「ジモト／地元」を取り上げるさいには、幾つかの目論見が意識されている。第一に、激変する現代日本社会の政治・社会・文化状況を踏まえるとき、人々が日々生きる＝暮らす空間としての「ジモト／地元」に照準することは、学際的な共同研究の試みとして意義があるとの判断が為されている。つまり、異なる学問ディシプリンに基づき多様な観点から共同研究を推し進めることによって、従来から取り上げられてきた「地域」とはなにかしら異なるニュアンスとこだわりをもって語られ／生きられる「ジモト／地元」の独自性を浮かび上がらせることができる。そのように期待されるのだ。

だが、「ジモト／地元」をテーマにすることの意義は、そうした学問的な関心に尽きるわけではない。シンポジウム登壇者の顔ぶれや、エクスカッション実施に際しての協働からも明らかのように、「ジモト／地元」をめぐる研究活動は、常にすでに「ジモト／地元」に関わる当事者たちの共同実践にほかならない。その意味で先端研による「ジモト／地元」に関する研究は、Social Science Shop＝「Sキューブ」としての問題関心と実践志向に支えられている。ただ単に学術的な成果を目指すだけでなく、そうした成果を踏まえ現実社会＝「ジモト／地元」に対してどのような社会的貢献や知的還元ができるのか。それこそが、「ジモト／地元」をめぐる研究に際してなによりも重要な課題である。

そうした理念と目標に照らしてみると、現時点での取り組みは、ようやく緒についた段階に過ぎない。シンポジウムで交わされた研究者と実践者たちとの議論は、学問研究の成果を現場での政策・実践に活かすという「予定調和的」な連携の実現とは程遠く、むしろ双方の隔たりが明らかになった。しかしながら、そうした「隔たり」がこれまでは意識されることすら少なかったことを考えるならば、今回の事業を通じて試みられた「Sキューブ」を理念に掲げる研究所による「ジモト／地元」を巻き込んだ研究／共同実践には、大きな意義があると言えるだろう。

今回掲載する「ジモト／地元」を巡る研究／共同実践の報告と記録は、研究を通して得られた明確な知見や政策提言に向けた方向性を提示するものではない。むしろ、多様で異なる当事者・関係

者のあいだで「ジモト／地元」について論じ、そのことによって具体的な問題解決を図ることがいかに困難であるかを指摘するものかもしれない。だが、だからこそ、こうした知的試み＝実践には意義があるはずだと考える。「学問の世界」にかたくなに閉じこめるのも、安易な「ハウツー」を提供するのもなく、立場と利害を異にする多様な関係者のあいだに不可避免的に生じる矛盾や緊張をしっかりと受けとめたうえで、具体的にどのような実践や活動が可能であるか。そのことについて、研究／実践の双方から粘り強く取り組むこと。それこそが、先端社会研究所が担うべき使命のひとつである「Sキューブ」に求められることにほかならない。

◆ 2009 年度先端社会研究所シンポジウム

『ジモト』という現象 ―空間をめぐるアイデンティティのゆくえ―

パネリストによる回顧と展望

先端社会研究所では、2010 年 1 月 29 日、上記のシンポジウムを行った。以下は、パネリスト（五十音順）による本シンポジウムに関する回顧、批評、展望である。

【なお、2009 年度シンポジウムに関しては、先端社会研究所紀要第 4 号掲載の活動記録も併せて参照されたい。】

今井信雄（関西学院大学社会学部准教授）

「ジモト」の社会学に向けて

ジモトを「地元」ではなく「ジモト」と表記するのは「記号としての地元」という問題提起を含んだものだからだろう。記号としての地元をあらわすのは、音楽や小説や漫画などのポピュラーカルチャーで近年、地元をテーマ化した作品が支持されている現状を映し出している。とはいえこれまで地域社会学や都市社会学は、言葉は違えども「地元」について研究してきた。するとジモトをテーマ化するためには、(1) 地域社会を対象にした社会学的研究の延長線上に置いたうえで、(2) 記号としての地元という分析視角を加えることの有効性を指摘し、(3) 「地域」や「地元」ではなくジモトという表記で社会学の俎上に載せることで何が明らかになるかを明確にする、ということが必要なのではないか。

そこで、上記 (1) ～ (3) に取り組むために、いくつか論点を提示してみようと思う。まず、1 つめ。学校をめぐるライフステージの移行という問題。「ジモト」をめぐるコミュニケーションが成り立つ場面とは、地元以外のものとのコミュニケーションの場面においてであり、典型的には進学や就職などで地元を離れるときであるだろう。学校卒業後に次のステージ(学校であれ就職であれ)の「他者」との接触において「ジモト」が語られる。

2 つめ。若者世代の就職難と非婚化という問題。地方から都会に出て正社員となり配偶者を得て新しい世帯を構える、という人生のモデルにおいては、結婚後に地域社会の中で生活することにより、その場が第二の新しい「地元」になっていく。しかし、その人生のモデルが失われたのならば、

いつになっても若者のまま、つまり、生まれ育った場所としての地元だけが存在し、新しい世帯を構えることで成り立つ第二の地元を獲得することができない。

3つめ。地域活性化の問題。地元の文化や歴史を観光に生かそうとする方向性がある。世界文化遺産の「暫定リスト」への自治体からの公募（2006年～2008年）が、この動きに拍車をかけた。日本全国の自治体が、地元の文化や歴史を掘り起こし暫定リスト入りをめざした。あるいは地元で生産された農作物を積極的に選んでいこうとする地産地消運動などの動きもまた、地元を強く意識させる。

それぞれ関連がないように見える3つの論点は、1つめが若者の、2つめが若者より少し上の世代の、3つめがさらに上の世代の問題として、世代ごとの問題として考えることもできるだろう。しかし、ここで指摘したいのはそれぞれの論点が「過去」を含まざるを得ないことである。ジモトを語ることが過去を語ることにつながることで、そしてそこからどのように現在と未来を語ることができるかということ、それこそがジモトをテーマ化し社会学の俎上に載せる意義だと私自身は思っている。

外国人の問題（差別や就労など）やジェンダー差の問題なども含むジモト研究の可能性は、大きいと言えるだろう。しかし繰り返すが、その可能性は「地域」ではなく「地元」ではなく「ジモト」研究であることの意味を明確にすることによって、なされるものだと考えられるのである。

川端浩平（関西学院大学大学院G P 特任助教）

地元／ジモト概念の再考

研究、行政、NPO という異なった立場から地元／ジモトに向き合っている四人がその実践や課題について議論した。ふだんは擦れ違いがちな、異なった立場の人びとが出会い議論を交わすことは、何が起こるか分からない異種格闘技的な要素がありとてもスリリングな試みである。しかし、ディスカッションする際に共通の地元／ジモトをめぐる理解が存在していない場合、議論を深めていくには不向きであるし、そもそも何のために議論をしているのかという、共通の目的が曖昧なままになってしまうこともある。シンポジウムの主催者の狙いとは異なるであろうが、この後者のことを前提としてシンポジウムを振り返ってみると、あえて一歩下がってもういちど地元／ジモトという概念を再定義してみることから出発してみるのも良いのではないかと思う。

地元／ジモトという言葉の系譜を辿ると、地方という言葉に行き着く。1970年代後半ころには、環境問題等の近代社会への批判的（反省的）視座から、地方という中央からの呼び名に対して、そこで生活する人びとの視点という意味合いを込めて地域という言葉が用いられるようになった。それ以降の村おこしやまちづくりでも、近代社会への批判的な価値観が基調となっている。昨今使われている地元／ジモトという言葉にもグローバリゼーションとそれがもたらす均質化への批判的な視座を読みとることができる。グローバリゼーションがローカルな政治・経済・文化を均質化することへの危機感から「どげんかせんといかん」と、固有な歴史や文化の発掘と発信が目指されている。そのなかには、可能性を感じさせるものが少なくないし、何よりもローカルな生活空間を生き

る人びとのエンパワメントとなっている。

このように、地方、地域、地元／ジモトという言葉の系譜を辿ってみると、それらの表明が社会の均質化や流動性の高まりに対して批判的にローカルなものを立ち上げていくことであることが分かる。しかしもう一方でそれらは、グローバルなものとの調整を図りながら、ローカルな社会で生活する人びとを包摂する社会統合の装置としても機能している。つまり、ローカルなものとは何かということの合意が、グローバルなものとのあいだで緊張関係をはらみつつも模索されるのである。このような社会統合の概念として機能している論理を地元とするならば、そこには含まれることのない人びとの営み、記憶や風景をジモトという主観的な概念として区別することができる。そしてこの後者のジモトとは、私たちが日常生活レベルで素朴に感じるローカルな生活空間に対する愛着や憎悪の感覚を表現するものである。

しかし、産官民学の連携といったとりくみにおいては、この諸個人の主観的な概念であるジモトと社会統合の概念である地元の区別が不明瞭になっているのではないだろうか。ともすれば、地元とジモトのあいだに存在する緊張関係が軽視されてしまうのではないだろうか。「どげんかせんといかん」と早急に解決策や処方箋を提示するまえに、そのような緊張関係に向き合うことこそが地元／ジモトで起きていることの意味について考える醍醐味ではないだろうか。異なった職能や専門知識を持った人びとが協働するためにローカルなものをめぐって議論するといった場合に、可能性と困難の双方が衝突する領域に共通のプラットフォームを設定するという段階にまであえて一歩下がってみたいこと、ここが刺激的な異種格闘技戦のためのアリーナを形成する出発点ではないだろうか。

【本稿と関連して以下の論稿を参照されたい。】

川端浩平 (2010) 「もう一つのジモトを描き出す—地方都市のホームレスの若者の事例から地元現象を考える—」『先端社会研究所紀要』第4号、pp.35-51.

鈴木慎一郎（関西学院大学社会学部教授）

空間をめぐるアイデンティティの編成について、歴史的・地理的にある程度の広がりをもった視野から、議論をすることができたと思う。また、このテーマに関連してくる一連の語群——空間、場所、場、地域、地元、ジモトなど——をめぐり、それぞれの用法やニュアンスの類似や相違をいったん整理してみる必要性を感じもした。自分の研究関心にひきつけると次のようなことがいえる。近年の世界の音楽産業においては、パッケージ化されたソフトの売り上げ低下により、収入源としてライブイベントをこれまで以上に重視する傾向が音楽家の間で強まっている。とりわけ、メジャーのレコード会社に属さない音楽家にとっては、自分の生活する地域のクラブやライブハウスやカフェや路上での演奏、またはそれによって構築されるネットワークが重要になる。こうした動向の中で、「ジモト」をめぐるどのような実践がみられるのか、今後も注視していく意義があるだろう。

谷村要（大手前大学メディア・芸術学部専任講師）

一言で「ジモト」といっても、その「ジモト」像は、それを語る一人ひとりの間で大きく異なるものである—短絡的ではあるが、このシンポジウムを通して描き出されたものはまさにそれだったのではないだろうか。

誰にとっての「ジモト」か。誰のための「ジモト」か。どこにある「ジモト」か。それぞれの生きた／生きている「ジモト」によって、その「ジモト」の意味は異なってくる（実際、パネリスト間でもその意味は大きく違っていたように思われる）。

本シンポジウムの第Ⅱ部でも述べたように、谷村は、アニメを用いてまちおこしをしている地域の当事者とそこを訪れるアニメファンに対する調査をこの2年半ほど続けているが、彼らはそれぞれが異なる「ジモト」像をそこに見ている。地元在住の当事者は、「地域活性化」の起爆剤としてアニメというコンテンツを通じて形成される場所性に期待し、地域外からその地域を訪れるアニメファンたちは、地域に自分たちの趣味が受け入れられていることに喜びを見いだしている。両者にとってそれぞれの「ジモト」像は異なるが、しかし、同じ場所に「ジモト」を見いだしている状況が、そこにはある。それが、地域外の人びとと地域の人びとが協働してまちおこしをするという現象をまた生み出しているのだが…。

しかし、誰もが自身の「ジモト」を生き、それを語りうるからこそ、一方で、その「ジモト」像の「ズレ」は根深いものである。「ジモト」に多様な欲望を仮託する状況がある中、この「ジモト」像を巡る「ズレ」を踏まえた上で、いかにそれを語っていくのか。研究者が多様・多層な「ジモト」を可視化する際に念頭に置くべきことであろう。

中野康人（関西学院大学社会学部教授／先端社会研究所副所長）

ジモトとは何なのか。個人にとってのある「場」のことなのか、それともその「場」そのものなのか、そこにある事物のことなのか、そこでつながる人々の関係なのか。論者によってさまざまな定義が可能である。今回のシンポジウムでは、私はジモトを形成するものの多様性を景観に関する意識調査のデータから論じ、ジモトの景観に対する人々の意識、つまりはある種のジモト観、を紹介したのである。同じ物理的な景観に対しても、人によって評価や認知が異なっており、異なるジモト観が存在している。しかし、西宮市をさらに小さな小中学校区単位のコミュニティにまで分割してそのコミュニティ単位で比較をするとコミュニティ毎に美しさの認知や内容評価に有意な差が観察される。それぞれのコミュニティを評価して違いが出たのであれば、そのジモトの物理的景観が違うという解釈ができる。しかし今回の調査では総体としての西宮市に対する評価を尋ねており、それでもコミュニティ毎にジモト観の違いが観察されている点が注目に値するだろう。つまり、ジモトに住まうことによって生じる人々の考え方の違いがあるということである。さらにいえば、他の報告者の話題にあった「まちづくり」のような意図的な枠組みがなくても、ジモト観の違いが生じていることは興味深い事実である。ジモトの個性を意図しなくとも、異なるジモト観が生じてい

るのである。

シンポジウムでは西宮市の事例を紹介したが、2010年度から始まった先端研の景観／空間プロジェクトでは、こうした人々の景観意識の違いをいくつかの自治体を比較しながら調査をおこなっている。そのフィールドの一つ、長野県安曇野市は西宮とは異なる様相をていしている。西宮市も「美しい」と景観をポジティブに評価する回答者が過半数を占めていたが、安曇野市の場合は9割以上の回答者が景観にポジティブな評価をもっている。特に安曇野から見える山々に対する評価が強く影響しており、市内の地区毎に差は大きく無い。日本アルプスという強い要素がある安曇野市とそうした核となる客観的事物に乏しい西宮市との違いが、ジモト観のばらつきの有無に影響を与えているのかもしれない。また、西宮市が比較的人口の流動性が高い自治体であることも影響している可能性もある。今後も、比較事例を積み重ねながら、ジモト観が醸成されるプロセスを探索していきたい。

山口覚（関西学院大学文学部教授）

このシンポジウムで採用された「ジモト」という語とその表記は、おそらく、どこかに住まう誰かを中心とした不確定な空間を意味しよう。多元的であるはずの「ジモト」を一般化するのは難しい。シンポジウムを通じて「ジモト」の姿はますます拡散されていき、それを適切に把握するのは困難であった。しかし同時にそれについて考える楽しさも感じられた。「ジモト」は人々とともに確かに存在するからである。シンポジウムでは、残念ながら私自身は不発のまま終わってしまった。先端研のスタッフにもそう感じられたのかもしれない。図らずも2010年春に先端研の「景観／空間プロジェクト」に参加するよう要請されて今日に至る。プロジェクトにおける研究テーマの1つとして、都市部で乱立するようになった「タワーマンション」という新たな居住形態を取り上げている。「都心回帰」現象の象徴とも言えるタワーマンションの調査を通じて、現代都市住民にとっての「ジモト」について継続的に考えてみたいと思っている。

◆工都尼崎市を見せる

―尼崎港クルージング+寺町巡り（エクスカーション報告）―

山口 覚（関西学院大学文学部教授）

Ⅰ はじめに：試みとしてのエクスカーション

景観／空間プロジェクトでは各研究員が個別ないし共同研究のテーマをそれぞれ設定し、適当な調査・分析手法を用いて研究を進めている。しかし共通項もある。いずれのテーマも何らかの具体的なフィールドと結びつき、現地を訪問すれば実際に当該景観を確認できるということである。筆者にもかかわりのある地理学という分野では、「エクスカーション（巡検）」と称して複数の人間とともに現地に出向き、具体的な景観に触れながら知識の共有をおこなうことが多い。そこで本プロジェクトでも1つの試みとしてエクスカーションを実施することにした。その最初の訪問地として、筆者が本プロジェクトにおいて研究対象地としている尼崎市を選んだ。工業都市（工都）である尼崎市では高度経済成長期の後、脱工業化時代において、新たな産業の確保とともに景観整備による町の活性化が重視されてきた。プロジェクト研究員やその他の人々とともに尼崎市の景観を実際に見ながら同市の現状や景観行政について理解を深め、意見交換が出来ればと考えたのである。

今回のエクスカーションでは「尼崎港クルージング」をメインコースとして考えた。また、それに続けて、尼崎市から「都市美形成地域」として指定されている寺町も巡検することにした。

Ⅱ 新たな景観表象としての河川・運河クルージング

尼崎港クルージングについては、先端社会研究所第6回定期研究会（2010年10月15日）において「工都尼崎の記憶を伝えるまちづくり」との題目で講演して下さった若狭健作氏（地域環境計画研究所）に引き続きその準備や説明をお願いした。すなわち、兵庫県の港湾施設の借用手続きからボートの手配、現地での説明に至るすべてについてである。

若狭氏は関西学院大学総合政策学部出身であり、現在所属している民間シンクタンクの地域環境計画研究所において日本各地の町づくりなどに携わってきた。また、尼崎公害訴訟における和解金の一部を流用して2001年に設立された「尼崎南部再生研究所」の主要メンバーでもある。同研究所はその名の通り南部工業地域の再活性化を目的とした機関である。南部地域は尼崎市に公害イメージをもたらした中心地であり、高度経済成長期以降では工場の撤退や規模縮小によって衰退傾向にある。そのため、同研究所では行政やその他の人々とともに南部地域において「尼崎運河博覧会（うんぱく）」のようなイベントを開催したり、景観の新たな見せ方を提案するといった活動に取り組んで来た。そうした「景観の新たな見せ方」の1つが尼崎港クルージングなのである。そのノウハウは若狭氏が創り上げたものである。氏によれば、卒業論文作成のための調査において、ドイツ・ルール工業地帯での運河クルージングを見る機会があったという。古い工業景観を見ながらワインを飲んで楽しんでいる人々の姿に触発されたことが、尼崎港クルージングとして結実したのである。

尼崎港は工業専用地域であり、人は住まない。工場用地であるというだけではない。ここは巨大な防潮堤によって人々が海面から引き離された場所でもある。同市南部には広大なゼロメートル地

帯が広がっている。1950年のジェーン台風による莫大な被害などを考えれば、防潮堤の建設はやむを得ない措置であった（表1）。しかし尼崎都市・自治体問題研究所編（1994）の『ベイエリアは誰のものか』で主張されているように、臨海地域が一般市民を排除し続けてきた場であることも間違いない。こうした状況にあって若狭氏たちの活動は各方面から注目を集めている。たとえば同氏の活動は朝日新聞の記事（2007年6月4日）において「運河生かす構想追い風に」として紹介された。同氏は2004年から尼崎港において春と秋に運河クルージングを始めており、それらの運河が2007年に国の「運河の魅力再発見プロジェクト」の支援対象に含まれたことが「追い風」になっているという。尼崎南部再生研究所の様々な活動は、行政と様々なかたちで結びつきながら新たな動向を創り出してきた。これまで排他的な場とされてきた尼崎市南部の工業地域の景観やイメージは、行政の支援を受けながら、若狭氏たちの活動を通じて変化しつつあり、また一般に流布しつつある。観光ガイドブック『るるぶ尼崎市』（2008）の冒頭では、尼崎港や南部地域に立地する工場景観が取り上げられている。

なお、運河や水路への注目は日本の他所でも確認できる。たとえば東京に目を転じてみれば、2003年における六本木ヒルズのオープニングイベント「世界都市展」において、よく知られた『TOKYO SCANNER』とともに『TOKYO VEIN（東京静脈）』という水路をテーマにした映像が上映された。運河や水路を取り上げた書籍も珍しくない。2011年1月には『水路をゆく：東京の川・運河を巡りつくす！！』が出版され、付録であるDVDは「東京都心クルージング」と銘打たれている。

以上の点から、クルージングの目的は2つ挙げることができる。1つ目は、当然ながら、同氏の説明を聞きながら現地の景観的特徴を学ぶことである。そして2つ目は、同氏のような存在それ自体が新たな景観表象の在り方を示しているように思われるのであり、その活動の一端を現地で確認したいということであった。

表1 尼崎港クルージング関連略年表

年		事 項
1879年	明治12年	尼崎港における最初の浚渫・防潮堤工事（尼崎城の石垣を利用）
1929年	昭和4年	尼崎築港株式会社設立
1950年	昭和25年	ジェーン台風（尼崎市域で死者・行方不明28人、床上浸水18,679戸、床下浸水6,951戸）
1951年	昭和26年	防潮堤工事開始
1952年	昭和27年	尼崎競艇場開設、尼崎センタープール前駅、臨時駅として開設
1954年	昭和29年	尼崎開門完成、尼崎市防潮堤完成記念栄える産業博覧会開催
1960年	昭和35年	尼崎競艇場存廃問題（～1962年）
1963年	昭和38年	尼崎センタープール前駅常設化
1994年	平成6年	尼崎センタープール前駅高架化
2000年	平成12年	尼崎競艇場改築整備事業完成
2001年	平成13年	尼崎第三発電所・尼崎東発電所廃止
2005年	平成17年	パナソニックプラズマディスプレイ工場稼働開始
2007年	平成19年	21世紀の尼崎運河再生協議会設立（兵庫県、尼崎市、周辺企業など）
2008年	平成20年	21世紀の尼崎運河再生プロジェクト基本計画

出典：各種文献により作成。

Ⅲ 尼崎港クルージング

エクスカーシオンは2010年11月27日（土）に実施した。この日は気温こそ高くなかったものの、幸いにも好天に恵まれた。参加者は若狭氏を含めて19名であった。図1では同日における行程を点線で、各ポイントを数字で示している。

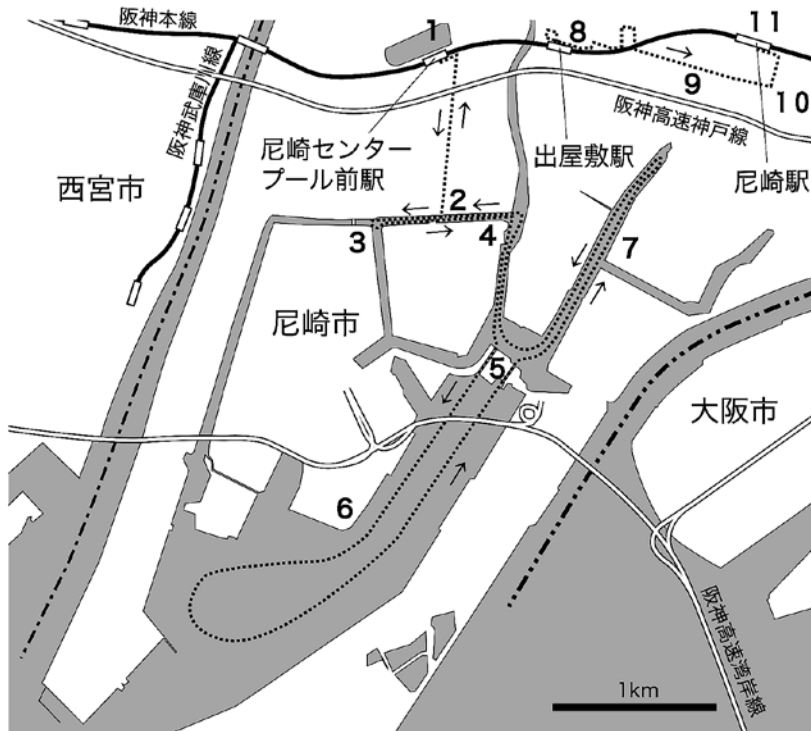


図1 尼崎港クルージングと寺町巡検の行程

13時に阪神本線の尼崎センタープール前駅（図1の1）の改札口で集合し、阪神高速神戸線の高架道路のかかる国道43号線を越えて南下する。国道43号線以南の大半の場所が、都市計画法に定められた工業専用地域に指定されている。約15分歩いて兵庫県尼崎港管理事務局（2）に到着する。ここで若狭氏と落ち合う。ボートを運航してもらうBAN PR社の社長である伴氏および2人のスタッフ、県職員の方にも挨拶をして、クルージングに出発する（写真1）。

まずは東西方向の水路である「北堀運河」を西へ向かう。この一帯は2007年に兵庫県、尼崎市および周辺企業などによって組織された「21世紀の尼崎運河再生協議会」（表1）の手で大規模に整備され、散策が楽しめるようになっている。ただしこの周辺には人が住んでおらず、日常的に訪れる者は限られている。若狭氏たちは「運河博覧会」など様々な仕掛けをおこないながら来訪者を増やそうと努力しているという。この運河は「北堀水門」で仕切られている（写真2）。ここから東へと向きを変える。図中の4に差し掛かる場所から南下するが、ここでタグボートに曳航された大きなバージ（運搬用舢舨）に遭遇して一同盛り上がる。

そして、尼崎港クルージングの「目玉」という「尼崎閘門」、通称「尼ロック」（5）にやって来る。閘門とは、水位に高低差のある2つの水域を結ぶための施設である。先述の通り尼崎市南部は



写真1 兵庫県尼崎港管理事務局での出港風景



写真2 北堀水門



写真3 尼崎閘門にて

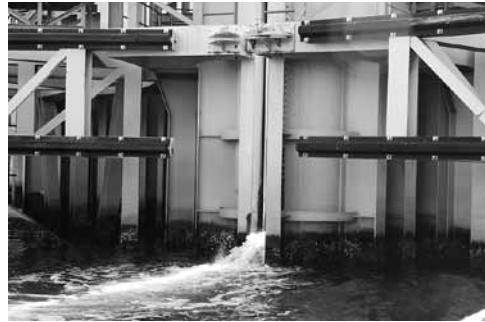


写真4 後扉（大阪湾側）の開門



写真5 尼崎閘門から大阪湾へ



写真6 尼崎第三発電所（1998年頃、筆者撮影）

ゼロメートル地帯であり、尼崎港内の水位は大阪最低潮位線（O.P.）よりも低い。よって大規模な排水ポンプによって河川水を排水するとともに、大阪湾の海水が入りこまないようにあらゆる水域が仕切られている。尼崎港と大阪湾を結ぶ唯一の出入り口がこの尼崎閘門なのである。この閘門は2枚の扉を持っている。1枚目の扉が開くとともに船舶は閘門内に入り、1枚目の扉を閉鎖した上で2枚目の扉を開く。この作業によって尼崎港内と大阪湾の間における水の出入りを最小限にとどめながら、船舶を通行させることができる。今回は我々のボートとともに先の大型バージも同時に閘門内に入って来たため（写真3）、一同さらに盛り上がる。前扉が閉められ、後扉が開かれると、閘門内に大阪湾の水が流れ込んできた（写真4）。

写真5は、閘門を出て阪神高速湾岸線をくぐろうとしている際の船上の様子である。大阪湾では風波が強くなる。時にボートが大きく揺れて波しぶきを受けることもあった。図1の6には、かつ



写真7 パナソニックプラズマディスプレイ工場



写真8 阪神高速湾岸線



写真9 工場景観1



写真10 工場景観2



写真11 工場景観3

て関西電力の尼崎第三発電所（写真6）が立地していた。この発電所は尼崎閘門の北にあった尼崎東発電所とともに2001年に廃止されている（表1）。尼崎市は関西における火力発電の中枢を担ってきたが、その火が消えたのである。両発電所は150m強の煙突を有しており、工都尼崎市の景観上のシンボルでもあった（朝日新聞、2003年9月5日）。かつて第三発電所があった場所では、2005年からパナソニックプラズマディスプレイ工場（写真7）が稼働している。工都の新たなシンボルであろうか。ここからさらに南下してから引き返す。湾岸線の下を再度通り（写真8）、尼崎閘門を通過する。

ここからは大型工場が建ち並ぶ場所となる（写真9～11）。図1の7には尼崎市を代表する大工場である住友金属工業がある。この工場地も含め、若狭氏からはそれぞれの工場や生産品の特徴が逐次説明された。たとえばある工場から流れ出ていた水は汚染水ではなく、冷却用のものである。ある工場は有刺鉄線の世界的メーカーのものである。またある工場ではチタンの生産を行っているが、その純度は世界最高レベルである、等々。以前のクルージングの際には大気汚染に苦しめられた人が参加して、汚染源であったはずの工場群を冷静に、興味を持って見ていたという。目の前の工場で勤務してきた人が参加したこともある。

若狭氏の詳細かつ軽妙な説明を受けながら、1時間強の非常に濃密な時間を持つことができた。近

年ではクルージングを実施するたびに、日本各地から「工場萌え」と称する工場景観のファンもやって来るといふ。このように、すでに尼崎市南部の景観をめぐる情報を各地で流通させることに成功している。そして我々もまた、普段訪れることもない場所を実際にめぐり、そうした場所やその景観に触れることができた。このような活動が新たな景観表象の1つであると改めて感じつつ、若狭氏とBAN PR社の2人のスタッフにお礼を申し上げて、兵庫県の港湾施設を後にした。

IV 寺町巡り

尼崎センタール前駅から阪神電車を出屋敷駅に向かう。ここから今回のエクスカージョンのサブである尼崎市中心部の徒歩巡検、特に「寺町巡検」を開始する。主目的は近世期に整備されて



写真 12 出屋敷商店街

今日に至る寺町(図1の9周辺)と、そこでの景観問題を確認することにある。小説家・車谷長吉の直木賞受賞作である『赤目四十八瀧心中未遂』の舞台となった出屋敷駅界隈、たとえば出屋敷商店街(8、写真12)などを歩き、また尼崎市中心部の商店街などを通過しつつ寺町を目指す。

さて筆者は、2010年度における研究テーマの1つとして、尼崎市の景観行政の中核をなす「尼崎市都市美形成条例」(1984年制定)に注目して関連データを収集してきた。この条例によって寺町は1989年に「寺町都市美形成地域」に指定され、景観保全の対象となってきた。しかし2004年には、景観を保全すべき市行政が同地に隣接する市有地を民間に売却し、そこに2棟のマンションの建設計画が立てられるという問題が起こった。朝日新聞(2004年5月22日阪神版)では次のように記される。

寺院や重要文化財が集中する尼崎市寺町地区の隣接地にマンションの建設が計画され、僧侶や住民らが「伝統的な景観が損なわれる」と反発。21日、マンション建設に反対する陳述書を市議会に提出した。マンション着工の前に、市は市道の一部を業者側に売却したが、これを説明する事前の住民説明会で、市がマンションの建設予定について触れなかったことも問題だとしている。(中略)

北側のマンション予定地の一部は、この3月まで市道(25メートル、幅2.5メートル)だった。市道の売却について、市は昨年12月、予定地の西側にある本興寺や近隣住民を対象に説明会を実施したが、このとき市がマンション計画について説明せず、住民らは2月に計画を知ったという。

予定地の一部は条例で定められた「都市美形成地域」。伝統的なまちなみを保全するよう市が業者に助言、指導ができ、市はこれまで窓の形や壁の色などについて業者に配慮を求めたという。

これに対し、本興寺の僧侶は「昨年12月の説明会でマンション建設の話は全くなく、だまされたようなものだ。業者側に市道を売却した市の行為は都市美形成条例の理念にも反する。

許せない」と話す。(中略)

僧侶らは、北側のマンション建設は説明が不十分なまま売却された市道を利用した計画で違法だとして、19日には業者に工事差し止めを求める仮処分を神戸市地裁尼崎支部に出している。

南側の1棟については次のように問題が解決された。「予定地の西隣にある本興寺が7日、2棟のうち、南側の1棟のマンション予定地約590平方メートルを約2億5千万円で購入し」(朝日新聞、2004年10月8日阪神版)、そこは現在では駐車場となっている。しかしもう1棟についてはこの時点ですでに工事が始まっており、現在では9階建てのマンションが建っている。今回のエクスカッションにおいては、本興寺が所有することになった駐車場に立ってマンションを見学しつつ、事の経緯について筆者が簡単に説明した。

なお、寺町の景観について改めて問うのであれば、この9階建てのマンションより以上に目に付くものがある。それは背後にある超高層(タワー)マンションである(写真13)。寺町の真北には「さきタワー・サンクタス尼崎駅前」(2008年竣工、29階、103m)が立地する。同タワーも含めてこの界限には3棟のタワーマンションがあり、いずれも寺町から確認できる(写真14)。特に「阪神尼崎駅南地区第一種市街地再開発事業(組合施行)」として計画され、2010年に竣工した「ローレルタワー尼崎」(29階、99m)の場合、全体事業費約90億円のうち、市負担額は約8億円となっている。他方で尼崎都市美形成条例に関する事業費はこの10年で大幅に減額され、寺町などの景観保全に用いられるべき補助金は2004年度にゼロになり、そのまま推移している。尼崎市の財政再建プログラムの一環として決定された「都市美形成助成事業の休止」の影響によるものである(尼崎市、2003)。補助金がゼロになったのとマンション景観問題が生じたのが同じ2004年の出来事であったのは単なる偶然のはずである。しかし社会的・経済的状況の変化によって尼崎市の景観行政や町



写真13 寺町横のマンションとタワーマンション



写真14 寺町とタワーマンション

づくりの在り方が大幅に変化してきていることは間違いない。

同市の都市景観・景観行政の変容については別稿で詳細に論じるとして、少なくとも現地では、寺町の景観保全の状況と、その隣接地に立てられた9階建てのマンション、さらには高さ100m前後のタワーマンションによって構成される現在の尼崎市の都市景観について、参加者に理解してもらえたことであろう。1980年代から2000年代以降に至る時間の経過の中で景観行政がいかに変容してきたか、この場所において具体的に見受けられたはずである。



写真 15 ニ崎城趾にて

威容が確認できる(写真15)。それらを見ながら17時30分頃に阪神尼崎駅(11)に到着し、ここで解散した。なお、希望者とともに中央商店街巡りをさらに続けておこなった。

そこから少し歩き、かつて尼崎城があった場所(10)である城内地区を通過した。寺町においても実施されなかった電線の地下埋設が、ここでは実施されている。この場所は尼崎市における景観行政の象徴なのかもしれない。城壁らしき壁に包まれており、それ自体はポストモダニズム様式の建築物である中央図書館(1990年竣工)のいささか奇妙な様相と、尼崎市内でもっとも高いタワーマンションである「ルネセントラルタワー」(2003年、36階、124m)の

V まとめにかえて

以上のように尼崎市においてエクスカージョンを実施した。特に今回は景観というキーワードに結びつけながら尼崎港クルージングと尼崎市中心部、特に寺町における徒歩巡検をおこなった。工都尼崎市は厳しい財政状況にあり、景観行政も変化しつつある。都市美形成地域である寺町に対しては補助金がカットされ、他方では新たな都市景観の形成要素である複数のタワーマンションがその横にそびえ立つ。タワーマンションの建設はその多くが民間資本によるものであり、行政が一部負担しているものもある。そして同時に、若狭氏のような民間の活力にも注目が集まっている。そのいずれもが尼崎市の都市景観(表象)の形成や変容と結びつくものである。その意味はこれから考察していきたい。

末筆ながら、まずはクルージングに関するすべてをお願いした若狭健作氏に対し、改めて厚くお礼申し上げたい。今後は若狭氏たちの活動も含め、都市景観表象の様々な在り方について考えてみたいと思っている。また、学内外の参加者の皆様にもお礼申し上げたい。現地において多少なりとも何かを得て頂けたとすれば幸いである。先端社会研究所の事務員の皆様からは旅行保険などの件でご助力を得た。そして、こうした貴重な機会を与えてくれた先端社会研究所にも感謝したい。

参考文献

尼崎市(2003)『尼崎市経営再建プログラム』尼崎市、150頁。

尼崎市地域研究史料館編(1996)『尼崎地域史事典』尼崎市、486頁。

尼崎都市・自治体問題研究所編(1994)『バイエリアは誰のものか—尼崎臨海地域の歴史的役割と課題—』自治体研究社、200頁。

岡本静心編(1969)『尼崎の戦後史』尼崎市役所、353頁。